



六ヶ所村立郷土館

企画展

今よみがえる富ノ沢遺跡

～日本最大級の縄文集落の盛衰の謎に迫る～

自然豊かに恵まれた六ヶ所村には、先史時代からの遺跡があり、昭和50年代には「むつ小川原開発」により多くの遺跡が発掘された。今回は、六ヶ所村にもあった日本最大級の富ノ沢遺跡を紹介する。この遺跡は円筒土器文化圏に属し、青森市三内丸山遺跡に次ぐ縄文時代の大集落跡である。円筒土器の変遷を紹介する展示と、富ノ沢集落の盛衰や新たに出現する集落の謎にせまる企画展として開催する。

◆ギャラリートーク 7月15日(土)10時から11時

講師 三内丸山遺跡センター 副所長 小笠原 雅行 氏

■遺跡巡りツアー 8月26日(土)9:30~12:30

講師 東海大学 教授 松本 建速 氏

【円筒土器と集落の変遷の歴史】

1 円筒下層式土器 泊(1)遺跡 前期

「円筒土器文化圏の始まりの土器」

円筒下層式土器は、縄文1万年の中で一番多彩な縄目の文様をもつ。縄目の並びが地域によって異なり、「津軽と南部」の様な地域性が見られる。



円筒下層式土器

2 円筒上層 a 式土器 上尾駈(1)遺跡 中期初頭

「中期の始まりの土器」

円筒上層 a2 式土器は、口縁部に太い粘土紐が付くのが特徴で、その中には4通りの縄の押圧が付き、縁が大ぶりに波立っている。全体的に筒形で、胴部に斜縄文がつくことでシンプルに見える。



円筒上層 a 式土器

3 円筒上層 b 式土器 富ノ沢(1)遺跡 中期前半

「まだ集落が形成されていない頃の土器」

富ノ沢遺跡で見つかる一番古い円筒土器。口縁部の粘土紐の文様がより複雑化し、すき間のC字の縄の押圧文が特徴的である。集落が始まる頃、円筒上層 b 式土器を作る人と円筒上層 c 式土器を作る人が共存していたのかもしれない。



円筒上層 b 式土器

4 円筒上層 c 式土器 富ノ沢(2)遺跡 中期中頃

「集落が形成され始めた頃の土器」

円筒上層 c 式土器には、伝統的な縄の押圧文が見られない。集落が始まる頃のもので、住居跡が9棟だった。故郷を離れ、新たなデザインの土器をもつ若い集団がやってきて、モノや人が集まる新たな集落が始まったと考えられる。



円筒上層 c 式土器

5 円筒上層 d 式土器 富ノ沢(2)遺跡 中期中頃

「集落が拡大し、計画的に集落づくりが行われる」

円筒上層 d 式土器になると、文様の装飾が粘土紐のみになる。この頃の住居跡から東北南部に多い大木式土器が見つかり、その影響を受けた円筒土器が出現する。



円筒上層 d 式土器

6 円筒上層 e 式土器 富ノ沢(2)遺跡 中期中頃

「大木式文化を取り入れた富ノ沢集落」

円筒上層 e 式土器の特徴は、串などで描かれる沈線文で、東北南部の大木 8a 式土器から影響を受けた文様だ。大木式土器文化に特徴的な石囲炉や無茎石鏟が見られ、集落の生活や狩猟にまで、大木式土器文化の影響が及んでいる様子を見ることが出来る。



円筒上層 e 式土器

7 榎林式土器 富ノ沢(2)遺跡 中期後半

「大木系土器に変化し、大規模な集落となる」

榎林式土器になると土器全体に渦巻文がつき大木 8b 式に極めて近い土器である。この頃、堅穴住居跡数が最大となり、住居跡や墓域の位置関係が今までの集落とも変わり、土器や石器など道具だけでなく、ムラの様子までも変化した。



榎林式土器

8 最花式土器 富ノ沢(2)遺跡 中期後半

「急激に集落が分散化し、小規模化する」

最花式土器になると、細長い n 字の文様がつき、大木 9 式土器につく逆 U 字文に類似している。この頃から集落の企画性が崩れ、住居跡が分散し衰退していく。



最花式土器

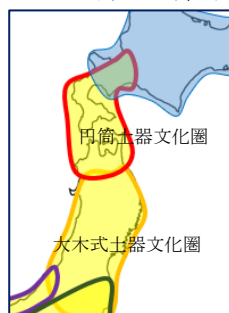
9 大木 10 併行式土器 富ノ沢(2)遺跡 中期末葉

「東北南部大木式文化圏の影響を受けた土器」

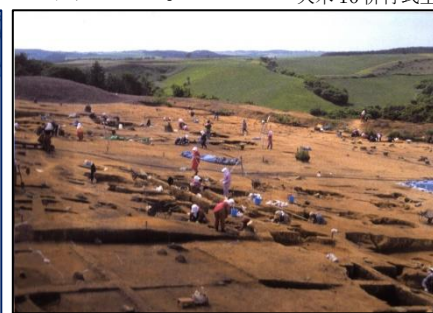
この土器の上部は粘土紐と円形の刺突文と突起がつき、胴部は膨らみ細い縄目がくつ。円筒土器文化の集落が衰退したのち、東北南部の大木式土器の影響を強く受けたこの土器は、少し離れた小高い丘の上の新たな集落から出土した。



大木 10 併行式土器



中期中頃の文化圏



富ノ沢(2)遺跡 C 地区発掘現場